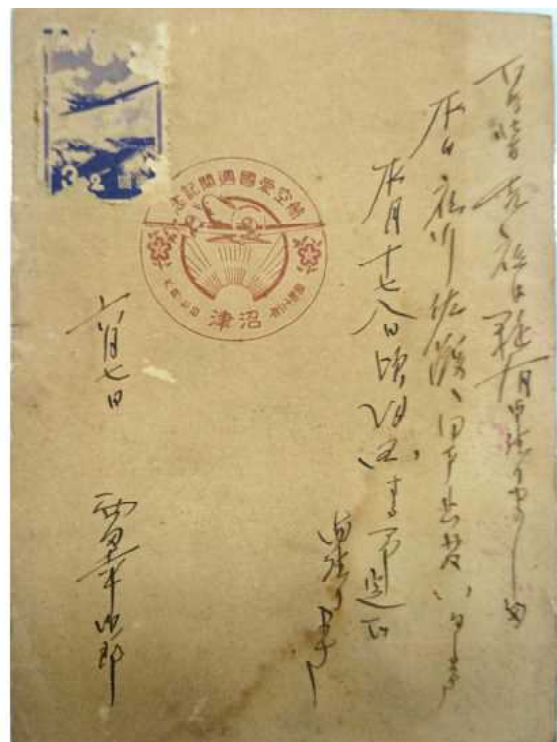


戦争と学校④ 愛国切手と土井英一

上坂部小学校は、昭和11年4月1日初代校長として金井賢治先生が就任しています。写真は沼津の消印がある金井校長宛ての葉書ですが、今から3年前に職員室整理の際に発見されたもので、「愛国はがき」が使用されています。愛国はがきに係っては、大阪朝日新聞 1937.5.31(昭和12)の記事に、『躍進「航空ニッポン」へ輝く拍車！ 献金切手愈よお目見得 あすから「愛国航空週間」』と題して『神風凱旋の国民的興奮から航空熱たぎる折柄”切手一枚輝く航空”と航空思想の確立と民間航空の振興を目ざして逋信省が発行する愛国切手および愛国はがきはいよいよ明六月一日から新意匠美しくデビューする』『わが民間航空界に百台の神風、千台の神風を生ませて航空日本の輝かしい躍進に一層拍車づけようというのである』等の文面がみられます。(神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫 航空(4-198)より)



葉書の文面

[]先夜は難有御座りまし多
本日夜行 佐渡へ□□出發い多します
本月十七、八日頃帰国する予定で
御座ります

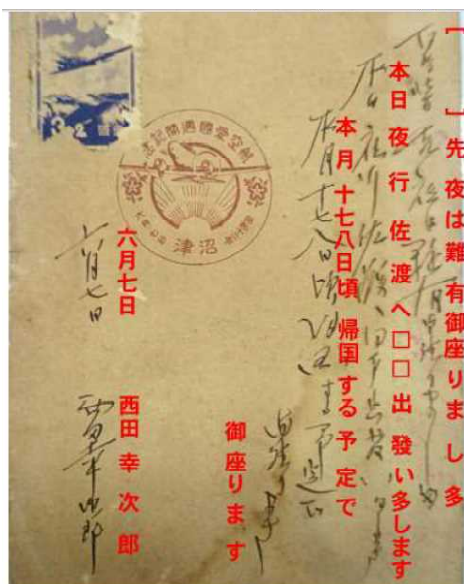
六月七日 西田 幸次郎

※本日出発と帰国予定を知らせる内容

※「多」は「た」。「座」は「ざ」。

※[]の部分は「拝啓」のような挨拶文の可能性

※□□は不明な字



愛国葉書と愛国切手

愛国葉書は2銭プラス寄付金3銭で、表面下半分には愛鷹山から望む富士山の絵(横山大観画とされる)、料額印面には金鷄(きんし)が描かれています。金鷄は、『日本書紀』に登場する日本建国を導いた金色の鷄。後に無血勝利の象徴とされた鳥です。また、上部には「大日本帝国郵便」の文字と菊の紋章がうかがえます。葉書代よりも寄付金のほうが多額なのには驚きです。1937.6.1に同時発売した愛国切手も葉書と同様に、我が国初の寄付金付となっています。2銭(第二種葉書用)、3銭(第一種無封書状120g迄)、4銭(同有封書状20g迄)の各切手には、いずれも2銭の寄付金が付加されます。グラビア印刷、大正透かし(横透かし)入りの切手で、日本アルプスの上空を飛ぶダグラスDC-2型機を図柄とします。下方に描かれた山は、常念岳から東天井岳、大天井岳、遠く鹿島槍、白馬方面を見たもので、岡田紅陽 撮影の写真に基づきます。逓信省と帝国飛行協会は、愛国切手発売にあわせて、日本の民間航空が諸外国に比べて大きく立ち遅れていることを強調し、民間航空振興と愛国切手購入を呼びかけるキャンペーンを繰り広げました。「切手一枚 輝く航空」というキャッチフレーズで、ポスター、ちらし、立看板を大量に作って全国の郵便局でPRしました。そのお陰か、特に切手は外国の切手愛好家にも人気があって、アメリカや志那(シナ)などから大量の注文が舞い込み、中央局だけでも4万枚以上の発行に至ったようです。収益は飛行場の建設費等に充てられました。



愛国切手にまつわる 熱い想いと 切ない命運

愛国切手の発案者は、土井英一(1909.9.17~1933.9.9)です。英一は「荒城の月」で有名な土井晩翠(1871~1952)の長男。英一は中学生の頃から健康を害し、高校を休学して転地療養。文系に転向して、1929(昭和4)年に東北大法文学部に入学、東洋哲学の研究を志しましたが、在学中に結核のため病死。満24歳にも満たない短い生涯でしたが、英一は病に侵されながらもエスペラント語を駆使して多くの人を動かし、国に新しい制度を導入させるほどの熱い想いと頭脳明晰で実行力のある人でした。彼が死を覚悟しながらも特に熱心に取り組んだのは、慈善切手の実現です。ある時、ヨーロッパの文通相手から来た郵便に、変わった料金表示の切手が貼ってあるのが彼の目に留まりました。それが郵便料金額に寄付金を付加した慈善切手であることを知ると、社会福祉事業(特にハンセン病や結核の患者の救済)に役立てるべく早速行動に移ります。英一はエスペラントのネットワークを駆使して世界の慈善切手を調査しレポートにまとめ、父 晩翠の大学時代の後輩 内ヶ崎作三郎 代議士(1876~1947)に働きかけます。熱き志に胸打たれた内ヶ崎は、こ

れを受けて帝国議会衆議院建議委員会に「慈善郵便切手発行二関スル建議案」を提出しました。本案は衆議院本会議で可決されましたが、逓信省内には難を示す人たちもいて、具現化の見通しが立ちませんでした。そこで英一は、「癩病 結核病の撲滅などが真の愛国的事業」として「愛国切手」と呼び名を変えて実現を図ろうとし、死の瞬間まで訴えかけました。英一の遺志を受けて、両親はハンセン病患者救済問題への関心を深め、尽力します。内ヶ崎を中心とした政治家やエスペラント、ハンセン病関係者たちも、英一の死の床での訴えをしっかりと受け止め実現に奔走しました。そして、ついに発行に至ったのが、先記 金井校長 宛ての葉書に示すところの「愛国切手」「愛国はがき」なのです。

私は校長宛ての葉書を見た時、「なぜ葉書の裏側にまで切手が貼ってあるのだろう」と当初不思議に思いました。これは差出人の西田氏が大いに賛同し、寄付のため葉書に加えて切手を購入し、裏面に貼ったものだったのです。愛国切手の発行が、英一の志したハンセン病救済ではなく、航空事業のためとなったのは、当時の社会状況の反映したものです。ハンセン病救済に対しては、「民族浄化」「差別と偏見」という世相から難しい時代でありました。比して、民間航空事業振興ならば国民にもアピールしやすく、国としても戦時体制が強化されていく状況の中で、民間航空が軍事と密接に関係していることから好都合でした。寄付金付切手が英一の希望に近い福祉の形で実現したのは、戦後の1947(昭和22)年 11月25日、社会事業共同募金切手(1円20銭 寄付金80銭)においてです。80年前の1枚の葉書を追っていくと、そこには関わる人々の熱き想いや願い、命運が見いだせます。それは、地域の歴史文化を知ることの素晴らしさでもあります。

参考文献 * Wikipedia「寄付金付切手」 * 「ズバリ 郵便趣味」(marutyanさんのYahoo!ブログ) * 郵趣ブック2月号(通算804号)日本郵趣協会 * 切手収集ことはじめ(TOKUさんのPHILATELIST) * 「寄付金つき切手の生みの親 土井英一」後藤育のウェブサイト 東北大学大学院文学研究科言語学研究室